

幻の花ブルーポピー

塚田 實

テレビ朝日の『徹子の部屋』は家内が時々観ているので、私も一緒に観ることがある。一九七六年二月から四十五年間続く長寿トーク番組だ。背景に印象的な絵画が飾られているのはご存知だろうか。画家堀文子が黒柳徹子をモデルに描いた『アフガンの女王』と題する絵だ。茶色のヴェールを被り、青色の民族衣装が映える。

堀は女子美術大学卒業で、ノーベル医学生理学賞を受賞し女子美の理事長でもあった大村智氏との交遊が深く、この絵も大村氏の所有になっている。

堀文子は、一九一八年生まれで、二〇一九年に百歳で亡くなった。彼女は二十九歳で外交官と結婚したが、四十三歳のとき死別。それからの彼女の生き方が凄まじい。何回も海外に出かけるなど、精力的に絵画制作に励み、実績を積み上げていった。八十二歳で幻の高山植物ブルーポピーを求めて、ヒマラヤ山脈の高地に挑戦する。花はヒマラヤの標高五千メートル前後のガレ場にひっそりと咲いているという。彼女は周囲の反対を押し切り、単身乗り込んだそうだ。「群れない、慣れない、頼らない」が彼女のモットーで、ブルーポピーはその象徴のように思えたらしい。彼女の挑戦はNHKの番組で紹介されたこともある。

ブルーポピーとの出会いはもう一つあった。私が中国に居たとき、山好きの先輩がひよっこり事務室に現れた。「これ良いでしょう。差し上げます」と言って、A4版に引き伸ばしたブルーポピーの写真を手渡した。ラピスラズリのような澄んだ青色が美しい。「ここでは撮られたのですか？」と聞くと、「四姑娘山スークニヤンサンの標高五千メートルあたりのことです。四姑娘山は四川省でもチベット高原東の端にあり、ここにもブルーポピーが生えているんです」とニコニコしている。写真は暫く机上に飾っておいた。

それにしても八十二歳で新たに難しいことに挑戦する意欲は素晴らしい。コロナ巣ごもりで鬱々としてはいけけない。事態が改善すればどんどん新しいことに挑戦してみよう。